

共に生きようとする倫理観

(2014 年 4 月 13 日中日新聞 内山 節 立教大学大学院教授 哲学者)

よりよい社会とは何かと定義するなら、それは安心感や信頼感のある社会のことだと思う。(略) 安心感のある社会とは、この社会にいれば誰しものが生きていけるという信頼感のある社会のことなのである。

現在の日本の社会は、この安心感や信頼感を失いつつあるようにみえる。倫理観のない、すさんだ社会が広がっているといっても良い。とすると倫理観はどこから生まれるのだろうか。それは、共に生きようとする結び合いの中から芽生えるものであって、国が教えるようなものではない。

自然と共に生きようとするれば、自然に対する倫理観も芽生えてくるだろう。家族と共に生きようとするときも、友人と共に生きようとする時も、家族や友人に対する倫理観が自然に生まれてくるだろう。

かつては地域と共に生きようとする都市社会や農村社会があって、ここにもその地域特有の倫理観が存在していた。以前の企業にも共に生きようという雰囲気があって、それがそれぞれの企業の倫理観を醸成していた。

今日の日本では、共に生きようとする結びつきが壊れてしまっているのである。だから社会を支えているはずのさまざまな倫理観も消えてきて、それが信頼感や安心感のない社会を生み出している。

共に生きようとする倫理観がなくなってしまうと、個人の論理や組織の論理が社会を引っ掻き回し、他者への配慮を持たない自己主張が横行するようになる。

(略)

自然や他の人々と共に生きようとする様々な営みこそが、倫理観のある社会、平和で安心感や信頼感のある社会をつくる基盤なのだという事を、私たちはもう一度想起する必要がある。